【研究報告】

本学理学療法学専攻１年次生の学習動機と職業意識

水池　千尋　　大城　昌平　　重森　健太
西田　裕介　　大町かおり　　吉川　卓司

聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部理学療法学専攻

（連絡先）053-439-1400（代表）
053-439-3411（研究室直通）
053-439-1406（Fax）
chihiro-m@seirei.ac.jp

Learning Motivation and their Professional Knowledge and Attitude toward the Physical Therapy in First-year Physical Therapy Students

Chihiro MIZUIKE, Shohei OHGI, Kenta SHIGEMORI, Yusuke NISHIDA
Kaori Ohmachi, Takashi YOSHIKAWA

Division of Physical Therapy, School of Rehabilitation, Seirei Christopher University

要　旨

本研究の目的は学習指導の参考とするために、本学理学療法学専攻１年次生がどのような学習動機を持っているか、またそれが理学療法（士）（PT）に対する職業意識とどのように関係するかを明らかにした。調査参加者はPT専攻１年次生全員の33名（男性21名、女性12名）、平均年齢19.2歳（偏差1.5、範囲18-25歳）であった。調査内容は、調査参加者の背景（性、年齢）、学習動機に関するアンケート、PTに対する職業意識に関するアンケートであった。学習動機に関するアンケートは、市川による「学習動機を測定する質問項目」を用いた。PTに対する職業意識に関するアンケートは独自に作成し、1）PTの職業イメージについて、2）PTになりたい気持ちの強さ、3）PTになるための学習意欲、4）本学での満足度、5）将来の具体的なPT像の５項目について調査した。調査集団の学習動機は、学習内容に関与した「内容関与型」の動機が高く、学習の内容自体を重視し、そして職業意識が高いほど、学習の質が高いようであった。このような学生集団に対し、教授者は、学生の職業意識と、内容関与的な学習動機を支える知的好奇心や理解要求、向上心を大切にした教育工夫が必要であると考えられる。

キーワード：理学療法学専攻学生、学習動機、職業意識
Key words : physical therapy students, learning motivation, attitude toward the physical therapy

【はじめに】

医学、理学療法学の進歩と発展や、理学療法の領域の拡大によって、理学療法士にはより高い専門知識と技術が求められるようになった。そのような要求に応じた知識や技術を習得するためには、学校教育や生涯学習のシステムの構築[1]に加え、自ら生涯を通して学ぶ姿勢が不可欠である。そのためには、学生自らが学ぶことの楽しさを知ることが重要であり、教授者にはそれを喚起する教授が求められる。そのためには、学生がどのような学習動機を持っているかを学生個人や教授者が知ることは、教育方法を検討する上で重要となる。

市川は、学習動機の「二要因モデル」を提案している（図１）[2]。このモデルは、学習動機に関するアンケート調査の結果をもとに「実用志向（仕事や生活に活かすため）」、「報酬志向（報酬を得る手段として）」、「訓練志向（知力を鍛えるため）」、「自尊志向（プライドや競争心から）」、「充実志向（学習自体が楽しいから）」、「関係志向（他者につられて）」の６タイプに分類し、これを「学習内容の重要性」を縦軸、「学習の功利性」を横軸とした二次元の座標上に位置づけて、「学習内容の重要性」と「学習の功利性」から学習動機を把握するものである。「学習内容の重要性」の縦軸の次元は学習内容そのものを重視しているかどうかを、「学習の功利性」の横軸の次元は学習による直接的な報酬をどの程度期待しているかを表す。このような学習動機の「モデル」を用いることで、学生の学習動機を測定することが可能であろうと考えられる。また、本学は理学療法士（以下、PT；Physical Therapist）を養成する医療専門職系の大学であり、PTという医療専門職を目指す学生が持つ学習動機、また、学習動機の特性と職業意識との関連性を把握しておくことは重要である。

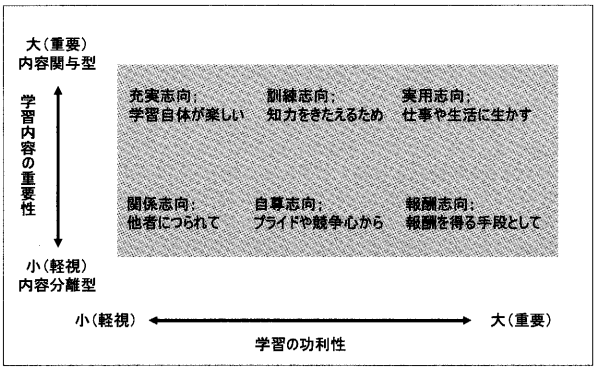

図１　学習動機の二要因モデル（文献２より引用）

本研究では、本学理学療法学専攻１年次生が１）どのような学習動機を持っているか、２）それが理学療法（士）（以下、PT）に対する職業意識とどのように関係するかを明らかにし、学習指導の参考とすることである。

【方　法】

１）調査参加者

調査参加者は、PT専攻１年次生全員の33名（男性21名、女性12名）、平均年齢19.2歳（偏差1.5、範囲18-25歳）であった。なお、本学は2004年に開校し、調査時点では１年生のみが在籍していた。

２）調査

調査内容は、調査参加者の背景（性、年齢）、学習動機に関するアンケート、PTに対する職業意識に関するアンケートであった。学習動機に関するアンケートは、表１に示した市川による「学習動機を測定する質問項目」[2]を用いた。質問項目は36項目の質問からなり、それぞれの質問に対し５段階尺度（非常にあてはまる、かなりあてはまる、多少あてはまる、少しだけあてはまる、全くあてはまらない）で評定される。結

表１　学習動機のアンケート調査表（文献２より引用）

学習動機のアンケート調査表（市川による）

氏名：　　年齢：　　歳　　性別：（男　女）　　記入年月日：　　年　　月　　日

これが学習動機をみるためのアンケートです。学習をすすめていく上で自分の学習傾向を知ることは大切です。自己理解のために行ってください。評価は、非常にあてはまる、かなりあてはまる、少しだけあてはまる、全くあてはまらないの５段階ですので、適当な項目に○を付けて下さい。

	非常にあてはまる	かなりあてはまる	多少あてはまる	少しだけあてはまる	全くあてはまらない
新しいことを知りたいという気持ちから					
仕事で必要になってからあわてて勉強したのでは間に合わないから					
勉強しないと、頭のはたらきがおとろえてしまうから					
学歴がよくないと、おとなになっていい仕事先がないから					
すぐに役に立たないにしても、勉強がわかること自体おもしろいから					
勉強が人なみにできないのはくやしいから					
何かができるようになっていくことは楽しいから					
勉強をして良い学校を出たほうが、りっぱな人だと思われるから					
いろいろな面からものごとが考えられるようになるため					
勉強したことは、生活の場面で役に立つから					
学習のしかたを身につけるため					
学歴があれば、おとなになって経済的に良い生活ができるから					
勉強しないと親や先生にしかられるから					
勉強が人なみにできないと、自信がなくなってしまいそうで					
いろいろな知識を身につけた人になりたいから					
わからないことは、そのままにしておきたくないから					
成績が良ければ、仲間から尊敬されると思うから					
勉強することは、頭の訓練になると思うから					
勉強しないと充実感がないから					
合理的な考え方ができるようになるため					
勉強で得た知識は、いずれ仕事や生活の役に立つと思うから					
知識や技能を使う喜びを味わいたいから					
勉強しないと、将来仕事の上で困るから					
みんながすることをやらないと、おかしいような気がして					
勉強しないと、親や先生にわるいような気がして					
友達といっしょに何かしていたから					
親や好きな先生に認めてもらいたいから					
ライバルに負けたくないから					
周りの人たちがよく勉強するので、それにつられて					
みんながやるから、なんとなくあたりまえと思って					
成績がいいと、他の人よりすぐれているような気もちになれるから					
学んだことを、将来の仕事にいかしたいから					
成績が良ければ、こづかいやほうびがもらえるから					
テストで成績がいいと、親や先生にほめてもらえるから					
学歴がいいほうが、社会に出てからもとくなことが多いと思うから					
勉強しないと、筋道だった考え方ができなくなるから					

果は1）充実志向（学習自体が楽しい）、2）訓練志向（知力を向上させるため）、3）実用志向（生活や仕事に生かすため）、4）関係志向（他者につられて）、5）自尊志向（プライドや競争心から）、6）報酬志向（報酬を得るための手段として）のカテゴリーに分け、各カテゴリーの得点を算出した。また、市川は1）充実志向、2）訓練志向、3）実用志向の3つのカテゴリーは学習内容に関与した学習動機であるため、これら3つのカテゴリーをあわせて「内容関与型動機」とし、また、4）関係志向、5）自尊志向、6）報酬志向の3つのカテゴリーは学習内容に分離した学習動機であるため、これら3つのカテゴリーをあわせて「内容分離型動機」としている[2)]。この分類を用いて、各志向の得点分布を比較した。

PTに対する職業意識に関するアンケートは、独自に作成し、1）PTの職業イメージについて、2）PTになりたい気持ちの強さ、3）PTになるための学習意欲、4）本学での満足度、5）将来の具体的なPT像の5項目について、5段階尺度で評定させた。

調査の実施は、理学療法専門教育の開始される前の1年次秋セメスター開始時に行った。理学療法に対する明確な知識や具体的なイメージが確立する前段階での調査である。

調査の実施にあたっては、調査参加者に目的を説明し、調査結果は成績に関与しないこと、正直な気持ちを答えるように説明し、同意を得て行った。なお、経時的な変化をみることができるよう、記名式とした。

3）統計処理

学習動機に関するアンケート結果は、1）充実志向、2）訓練志向、3）実用志向、4）関係志向、5）自尊志向、6）報酬志向の6カテゴリーに分けて、それぞれの得点分布を調べた。次に、各カテゴリー間に差があるかどうかについて分散分析を行い、有意である場合は多重比較検定を行った。また、「内容関与型動機」と「内容分離型動機」の得点の比較をstudent t-testで行った。職業意識に関する調査結果は、1）PTの職業イメージについて、2）PTになりたい気持ちの強さ、3）PTになるための学習意欲、4）本学での満足度、5）将来の具体的なPT像の5項目について、それぞれの尺度分布を調べた。また、Spearman順位相関を用いて学習動機と職業意識の各項目間の関連を調べた。統計学的な有意水準は5％未満とした。

【結　果】

1）学習動機について（表2）

充実志向、訓練志向、実用志向のカテゴリー得点が、他の関係志向、自尊志向、報酬志向のカテゴリー得点よりも有意に高値であった（全て$P<0.05$）。なかでも実用志向のカテゴリー得点が他の全てのカテゴリー得点と比べて最も高かった（全て$P<0.01$）。「内容関与型動機」と「内容分離型動機」の得点の比較は、有意に「内容関与型動機」が高値であった（$P<0.01$）。

2）職業意識について（図2）

PTの職業イメージが「良い」と「非常に良い」が29人（87.8％）、2）なりたい気持ちが「強い」と「非常に強い」が30人（90.1％）であった。学習意欲が「高い」と「非常に高い」が27人（81.8％）、本学の進学に対する満足度が「満足」と「非常に満足」が22人（66.7％）、将来のPT像が「漠然と持っている」もしくは「持っている」が26人（78.8％）であった。

表２　学習動機の調査結果

	充実志向	訓練志向	実用志向	関係志向	自尊志向	報酬志向	内容関与	内容分離
平均値	20.0	16.9	23.4	13.1	14.5	12.6	60.3	40.2
標準偏差	3.8	4.4	3.6	4.6	4.8	4.0	10.3	12.0

分散分析の結果、項目間には有意差があった（＝33.59、P＜0.01）。充実志向、訓練志向、実用志向のカテゴリー得点が、他の関係志向、自尊志向、報酬志向のカテゴリー得点よりも有意に高値であった（全てP＜0.05）。なかでも実用志向のカテゴリー得点が他の全てのカテゴリー得点と比べて最も高かった（全てに対しP＜0.01）。また、「内容関与型動機」と「内容分離型動機」の得点の比較は、有意に「内容関与型動機」が高値であった。

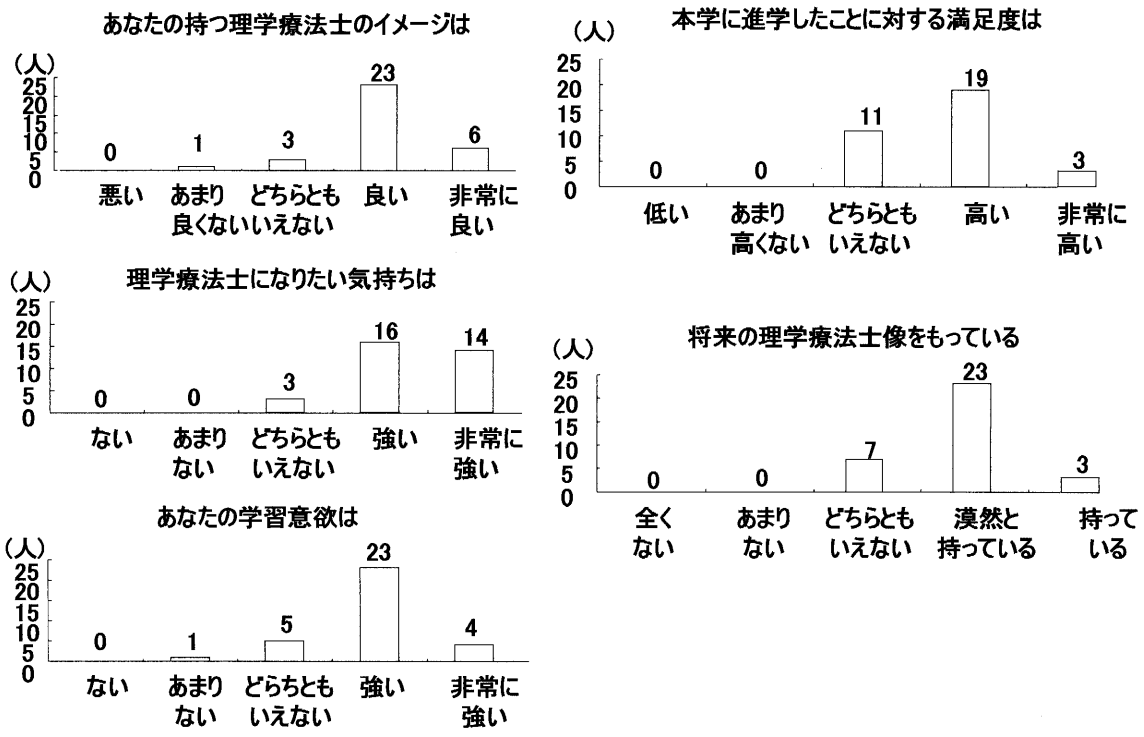

図２　職業意識のアンケート結果

表３　学習動機と職業意識の関連

	イメージ	気持ち	学習意欲	満足度	PT具体像
充実志向					.409(*)
訓練志向		.492(*)	.405(*)	.455(*)	.386(*)
実用志向			.382(*)		.439(*)
関係志向					
報酬志向		-.388(*)			
内容関与	.359(*)	.378(*)	.433(*)		.363(*)
内容分離					

3）職業意識と学習動機の関連（表3）

学習動機の「充実志向」が職業意識の「PTの将来像」と、「訓練志向」が「PTになりたい気持ち」、「学習意欲」、「進学の満足度」と、「実用志向」が「学習意欲」と「PTの将来像」と正の関連であった。逆に、学習動機の「報酬志向」は「PTになりたい気持ち」と負の関連であった。

【考　察】

市川による「学習動機を測定する質問項目」を用いて、本学理学療法学専攻1年次生の学習動機を調査した結果、「充実志向」や「訓練志向」、「実用志向」といった学習内容に関与した「学習内容関与型」の動機が高く、逆に、「関係志向」や「自尊志向」、「報酬志向」の「内容分離型動機」は低い結果であり、対象とした学生集団の学習動機は学習の内容自体を重視しているようであった。特に、「将来、仕事や生活に生かすため」といった「実用志向」が他の動機項目に比べて有意に高く、理学療法の専門職としての知識と技術を習得し、将来の仕事に生かそうとする学習動機が強いようであった。このことは、理学療法士という専門職を目指す学生の特徴としては、妥当な結果であったと思われる。

また、教育心理学の分野では、学習動機を引き起こす方法として、学習者の興味に訴えること、欲求・要求に訴えること、価値のあることを成し遂げようとする達成欲求に訴えること、自分の可能性を最大限に実現しようとする自己実現の欲求に訴えること（以上、「内発的動機づけ」）、学習目的をはっきりさせること、学習者に学習の結果を知らせること、適切な賞罰を用いること、学習者の競争心に訴えること（以上、「外発的動機づけ」）に分けられている[3]。「内発的動機づけ」に支えられた学習の方が、継続性があり、知的好奇心が高く、質の高い学習であると考えられている[4]。「内発的動機づけ」は、学習内容に関連した「学習内容関与型」の動機を意味する。今回の調査対象集団では「内発的動機づけ」が高く、このことから質の高い学習動機であったと考えられる。

職業意識に関する調査結果では、「職業イメージ」や「なりたい気持ち」、「学習意欲」、「満足度」の質問項目に対し、「良い」、もしくは「強い」または「高い」といった回答選択肢に分布が高く、対象集団では理学療法（士）に対して高い職業意識を持っていると考えられた。また「将来のPT像」についても「漠然と持っている」もしくは「持っている」という回答が多く、明確ではないにしても、将来の目標を持っているようであった。このような結果は、本学が理学療法士の養成を目的とした医療系大学であるため、そのような職業意識や、将来のイメージをもった学生が入学することから、矛盾しない結果であると考えられる。また、調査時期が入学後半年の時点であり、入学後からの意識変化が小さいことも要因の一つであると考えられる。

学習動機と職業意識の関連について、学習動機の「内容関与型動機」と職業意識の「PTのイメージ」以外の項目のいくつかと有意な正の関連を示した。特に、「訓練志向」と職業意識と関連が強く、職業意識が高いほど専門的な知識の修得意欲が高く、内発的な学習動機に支えられた学習を行っているようであった。逆に、学習動機の「報酬志向」は「PTになりたい気持ち」とは負の関連であった。このことは、「PTになりたい気持ち」の強い学生では、理学療法士になることを金銭的な報酬を得るための職業選択としてとらえているというよりも、その背景には理学療法士という専門職を目指す学生の「専門職者」としての意識があると考えられる。また、職

業意識が高い学生ほど、学習内容そのものを重視し、目的性を持った、質の高い学習を行っているという結果であった。その因果関係は不明であるが、学生の職業意識を喚起する教育（例えば、早期臨床教育や臨床技能教育など）が、内容関与的な学習動機を高める可能性があることを示唆すると思われる。

本研究の結果は、対象集団と質問紙の特性が結果に反映されているため、今回の結果が、対象集団の特性を示しているのか、またそれが質問紙による特性なのかどうかについては分からない。それぞれの調査項目との因果関係を明らかにしていくためにも、今後更なる研究が必要であると考えられる。今回の調査の対象集団は理学療法士という専門職を目指す学生であったため、他集団との比較検討や、対象集団の縦断的な追跡調査をおこなうことが必要であろう。また、学習動機や職業意識、それらの関連がどのように経時的変化を示すかについて、興味のあるところである。

本研究の課題は、調査方法の問題である。今回の調査は、経時的な変化をみることを重視し、参加者に不利にならないことを説明、同意を得た上で記名式にて行った。しかし、参加者の率直な意見をすべて反映したと言い切ることはできず、今後検討すべきである。

本研究は、市川による「学習動機を測定する質問項目」を用いて、本学理学療法学専攻１年次生がどのような学習動機を持っているか、またそれが職業意識とどのように関連するかを調査した。調査集団の学習動機は、学習内容に関与した「内容関与型」の動機が高く、学習の内容自体を重視し、そして職業意識が高いほど、学習の質が高いようであった。このような学生集団に対し、教授者は、学生の職業意識と、内容関与的な学習動機を支える知的好奇心や理解要求、向上心を大切にした教育工夫が必要であると考えられる。早期臨床教育やPBLチュートリアル教育、さらに体験的な臨床技能の習得のための客観的臨床能力評価試験などを取り入れた教育が、さらに職業意識や自身の将来像をより明確にしていく過程を感化し、さらに学生の自立心とモチベーションを向上するうえで有効であると思われる。

【謝　辞】

最後に、本研究の実施にあたり、市川伸一先生にアンケートの使用許可を得ることができた。ここに記して感謝の意を表する。

【文　献】

1）中屋久長：理学療法士教育の現状と課題 問われる理学療法士教育。理学療法21(12)、1498-1507、2004.
2）市川伸一：学習動機の二要因モデル。学ぶ意欲の心理学。PHP研究所、2001、pp46-61.
3）辰野千寿：学習に影響する条件。系統看護学講座基礎 6 心理学第 5 版。医学書院、1998、pp98-104.
4）市川伸一：動機づけ研究の展開。学ぶ意欲の心理学。PHP研究所、2001、pp37-45.

Learning Motivation and their Professional Knowledge and Attitude toward the Physical Therapy in First-year Physical Therapy Students

Chihiro MIZUIKE, Shohei OHGI, Kenta SHIGEMORI, Yusuke NISHIDA
Kaori Ohmachi, Takashi YOSHIKAWA

Division of Physical Therapy, School of Rehabilitation, Seirei Christopher University

Abstract

The purpose of this study was to clarify the correlation between the learning motivation in first-year physical therapy students and their knowledge and attitude toward physical therapy. Participants included 33 first-year students (21 males, 12 females), 19.2 (range 18-25) years old on average. Questionnaires were used to measure their learning motivation, professional knowledge and attitudes toward the physical therapist. We used the "questionnaire to measure learning motivation" by Ichikawa. Also, five-point Likert scale items were used to assess the students' professional knowledge and attitudes toward physical therapy in such areas as 1) image of physical therapy, 2) motivation to become a physical therapist, 3) learning motivation vis a vis the curriculum 4) satisfaction with entering this college, 5) their image of themselves as physical therapists in the future. Results indicated that the participants had a generally high learning motivation, and were knowledgeable about the physical therapist's job. Students who had a higher learning motivation provided positive comments and attitude towards physical therapy. Positive attitudes toward physical therapy may have been reflective of the students' learning motivation. In conclusion, the authors encourage curriculum changes that directly address issues of professionalism, create an active learning environment, and particularly regarding strategies for increasing professional knowledge and positive attitudes toward physical therapy and the therapist.